

【書 評】

田中秀夫『近代社会とは何か——ケンブリッジ学派とスコットランド啓蒙』

京都大学学術出版会，2103 年，204 頁

田中秀夫『啓蒙の射程と思想家の旅』

未来社，2013 年，218 頁

『経済学史研究』の書評では、新書も含めたややソフトな学術書も取り上げるようになったそう。本書二冊のうち、『近代社会とは何か』（以下①）は、著者自身が認めるとおり「アカデミズムの範疇に属する本」でありながら「いくらか「センスのある」軽量の本」（204）を目指しているとのことなので、この新しい基準で取り上げるのにふさわしいだろう。

さて、思想史にかぎらず、歴史研究は自己言及的である。研究対象のおかれた歴史的状況への関心は、本人の方法論上の禁欲に関係なく、研究者側の立ち位置への問い直しを含まざるをえない。ここで「研究者側」と言ったとき、実際には異なる地域・時代を生きる／生きた研究者との関係も含まれる。

私たちは通常、先行研究を「二次文献」として並べ、過去の研究であっても現在型で言及することが多い（「○○氏は…と述べている」と言った具合に）。ここには、その業績を生み出した研究者は、たとえ故人であっても、時空を超えた研究のコミュニティに属する存在として扱う、という暗黙の前提がある。もちろんこれはある種のフィクションなのだが、厳密な研究書では、他の研究者との個人的な親しさや世代の近さ・隔たりなどは（「はじめに」や「あとがき」をのぞいて）あまり表に出してはいけない「決まり」になっている。その意味では、①における、著者の一つ前の世代にあたる研究者たちに対するコメン

トは、狭い意味での専門書にはない読みどころになっている。具体的には、小林昇（第一章）、内田義彦（第二章）、水田洋（第三章）、ポーコック（第四章）、フォーブズ（第六章）が取り上げられ、第五章では日本と欧米の思想史研究の歴史的サーヴェイ、第七章は「啓蒙・共和主義・経済学」という著者の長年の問題関心について論じられている。

とくに日本の研究者について論じた第一～三章では、世代を違えて同時代を生きる／生きた研究者同士の、生の交流が示されている。そういう交流を通して得られた、各研究者の研究に対する姿勢やスタイルに対する著者の評言は、著者の次の世代に属する私には読んでいて非常に興味深い。たとえば第二章では「日本に市民社会を」という内田義彦の問題意識に対して、小林は経済学者の専門的禁欲に投じた」(50)というコントラストが示され、「解説を拒否し、作品としてのコスモスを論説に追求したあくことのない貪欲」(51)が「内田を継ぐ者のノルム」とされる。第三章「自然法、共和主義、スコットランド啓蒙—水田文庫と私の研究」は、章の副題にもあるように、自身の研究遍歴について詳しく述べられている。この章では、主題となっている水田洋以外にも、様々な研究者が登場する。たとえば佐々木武は、その助手論文が単著として出版されないままであるのはもったない、と著者から言われ、「「あれは心ある人に読んでもらったらそれでよい」と素っ気ない返事」

をしている(61)。もっぱら西欧の経済学・思想の歴史を研究対象としていた時代から、その研究自体が戦後日本の近代化を考察するための一次資料ともなっている現在、本書に含まれる様々な証言やそれに対するコメントも、貴重な歴史的記録となるだろう。

『啓蒙の射程と思想家の旅』(以下②)は、上で述べた「啓蒙・共和主義・経済学」という著者の長年のテーマをふまえつつ、より広範な「啓蒙思想の伝播・普及」(11)を問題関心としている。第一章は啓蒙思想と共和主義について(第二章については後述)、第三章は啓蒙の多様性を議論の皮切りに、ブリテン啓蒙とアメリカ啓蒙について論じている。第四章の「啓蒙と野蛮」は、同著者が編著者となった、ほぼ同じタイトルをもつ大部の論集(『野蛮と啓蒙』京都大学術出版会、2014年)が刊行されたことから明らかなように、近年の著者の大きな研究テーマと密接に関わっている。第五章は、共和主義に詳しい著者による、徳概念を踏まえた市民社会概念の読み直し、第六章は「啓蒙・共和主義・経済学」という研究テーマの著者自身による解題と言える。第七章は、短いながら、自己愛の概念を軸にルソーとスミスを比較考察している。

本書で目を引くのは、第二章の「啓蒙思想家の旅」である。思想家がどこを旅し、それがその思想形成にどう影響しているのかというのは、さらに掘り下げて研究されるべき、興味深いアプローチである。こうした研究方法はこれまでも存在したが、思想史研究の方法論が多様化する中で、思想家自身が見た(であろう)世界を(たとえば社会史などの知見を踏まえて)再構築して考察することが、一つの方法論としてもっと意識されてもよいのではないか、と感じさせる章であった。

この二冊とも、ほとんどは紀要等に既出の論文を再録したものである。同著者による、

今年出版された『スコットランド啓蒙とは何か—近代社会の原理』(ミネルヴァ書房)の「あとがき」でも、所収された論文の「多くはいわゆる「[紀要]」に書いた自由な論文である」と述べられている。体裁や専門性はやや異なるが、この三冊とも「研究成果を紀要にコンスタントに発表する」(323)という著者の研究スタイルの所産の一端と言えよう。この研究スタイルによって、著者は膨大な研究成果を生み出してきた。過去三年間に刊行された単著だけでも、2012年には『アメリカ啓蒙の群像—スコットランド啓蒙の影の下で1723-1801』(名古屋大学出版会)、2013年にはここで取り上げた二冊、2014年には上に触れた『スコットランド啓蒙とは何か』がある。編著書・(監)訳書を含めずとも、その生産性は抜きん出ている。

とはいえ、何事にもマイナス面がある。この二冊に関して言えば、やはり一冊の本としての統一感には乏しく、内容の重複も少なくない。①については、一冊の中でも重複部分がある。また、第三・四章と「おわりに」が「です・ます調」で、「はじめに」とそれ以外の章が「である調」であることにも違和感を覚える。②の第六章は「思想史研究者として」という節から始まっていることを考えると、むしろ①に収録されるべきだろう(ただ、そうすると①の第七章と重複する部分が多くなる)。②の第七章は、最初の発表媒体から考えても、他の章との専門性のバランスがやや悪い。さらに、②の第六・七章のみ注がない。両書とも、文体は読みやすく、近い分野の研究者や大学院生等にも有益な情報が数多く含まれている。それだけに、著者が自身の研究スタイルのプラス・マイナス両面を自覚し、いっそう密度の濃い書物に仕上げることも重要ではないかと思われる。

(壽里 竜：関西大学)